偉大なる昔の中国人は羊を表わすに敢えて頭のかたちをその象徴とした。

殷の時代の羊鼎(羊を煮る金属器)にある文字 。渦巻き状の角と大きな耳、山羊髭。甲骨文字では渦巻き角は具象を離れて単純化され、鼻梁を表わす縦線と左右の耳も横線1本。さらに金文では。小篆では角が渦巻き状ではなくなって。隷書では。楷書は均分を踏襲し、羊となった。

又羊という文字を片や旁などに使う漢字は多々。狼羝翔戟羖羭羚羌祇羯羚羶勀羔羞羨羞羨羨羞義羹恙羌差美洋などなど数多ある。

羔は子羊の意で、羊羔跪乳とは「子羊がひざまずいて乳を飲む」、すなわち孝の徳を表わす。牽もまた子羊のことである。羝も子羊を表す漢字であるが、それぞれ生後5ヵ月、6ヵ月、1歳未満の子羊を意味する。雄羊は羝、羖は黒い雄羊である。去勢された雄羊を表す漢字には羯がある。羭は黒い雌羊を指す。羌は細い角を持つ山羊である。羌の甲骨文字は羊の角をかぶった人を象っていて、羌族が放牧の氏族であることを表わすようだが、美という文字もまた、羊の角をかぶった人を象形したもので、『説文解字』に「羊大則美(肥えて大きな羊が美である)」とある。

「羊は祥也」と記されるよう、いにしえには大吉羊という言葉も在り、善という文字を始め、羊に由来する字には吉祥なるものが多い。

群という文字にも羊が使われているが、群衆(群衆)という言葉があるよう、羊が群れをなす性質に依拠するものである。『説文解字』の注にも「羊性好群(羊は群れることを好む)」とある。

かように諸考概はその考概の伝えるべき旨を思考者の胸に烙印する、すなわちその考概が做す一定のかたちがありあたかもそれが当然に理性的了解を齎すものとして絶対無制限の前提条件であるかのように無条件に受け留められ、A＝Aのごとく、了解という心的現象を起こさ令むるが、そのかたちの輪郭がいかにしてそのように象られているかについては、まったくの蒙昧である。

現象としてはアミノ酸(グルタミン酸、γ-アミノ酪酸、アスパラギン酸、グリシンなど)、ペプチド類(バソプレシン、ソマトスタチン、ニューロテンシンなど)、モノアミン類(ノルアドレナリン(ノルエピネフリン)、ドーパミン、セロトニン)とアセチルコリンなどの神経伝達物質によって特定のイオンチャネルが開かれ、神経細胞(ニューロン)の細胞膜内と外とで電位の差が逆転する電気的な現象(インパルス)が起こる。それはその特性によって人間の神経に特定の現象を起こす。

たとえば神経伝達物質としてドーパミンを放出するドーパミン作動性ニューロンのうち、赤核後方部(RRF)の中脳辺縁系投射をするドーパミン作動性ニューロン(A8細胞群)は、A10とともに大脳辺縁系(人間の脳で情動の表出、意欲、そして記憶や自律神経活動に関与している)に投射し、中脳辺縁系を構成する。中脳辺縁投射、中脳皮質投射は報酬予測に関わって快の感覚を生む。

我々が諸考概を理解したと感じるとき、快の感覚を得るが、理解とは突き詰めればこの納得感に拠る快とも言える。ただの物的な現象である。

つまり我々は知っていても実際、何も知らない、と言うか、知っているということは非知であるということなのである。

捏造、独断だ。いや、そういう見解も又。では何を信じ根拠とすればよいか。自家撞着する。何も言えない。仮の架空を言うしかないのか。いやさ、それさえも。それさえも、だ。あゝ、我々は真実だの正解だの妥当だの言うが、その価値設定の設定根拠を知らないし、そのフォームがさようなかたちに定められた理由も知らないし、もとより諸考概一つ一つを解して了知する解が得られず、いやさ、持ちようすらなく、完全無欠なお手上げ状態、中途のまゝ、未遂不収である。しかも前述のとおりこの批判は自己矛盾だ。自己矛盾と言うことさえも論考である故、自己矛盾であり、これは堂々巡りで言及し難い。なぜなら論考は論考によって批判されているから〝論理〟的には矛盾である（？）あゝ、キリがない！

いずれにせよ、その現象の起こる起因は生存にあり、その動機は生存への意志を礎とする。生物としての生存への命題に起源があり、それは常に未来を、明日を生き残らんとする営みである。ただしその生き残りは自分自身（個体）のこととは限らない。子を護り、恋人を護り、畢竟子孫を護る。もっと言えば種属を保存しようとする。だから生は必然的に明日に向かう。

すなわち一切は明日という時間性の設定においてのみ成り立つ、それを唯一絶対の前提として動機が実存する。もし明日が無ければ、論考すらもその基礎起源を喪うと言っても実存的に差し支えあるまい。すべては明日も生きていられると想い込んでいるから成立している。死が目前にあれば滅ぶ。根底が崩れる。すなわち生活が滅ぶから、それとともに滅ぶのである。生存の絶対君主制の崩壊、ドクサの世界の崩壊だ。

一切考概は有無の境界すら掻き消す真の空なる无だ。ムだ。

だから生は死と何ら変わらぬと雖も、生と死は同じではない。なぜなら死と生は同じだと想うような人は絶対に死を生と同じとは感じられないから。そのように主観的に観ることなく、現実、事実に即して客観的に観れば同じではないかという反駁があるかもしれない。だが、そうではない。すべてはドクサである以上、現実、事実というような価値設定も架空である。現実、事実という輪郭も架空である。ドクサである。現実だ、事実だ、と嘆く評価も架空である。同様に架空も架空だが。

以上、『羊を廻る暴言』。